

12課

6月18日

エジプトの王子、ヨセフ



安息日午後 6月11日

暗唱聖句

ファラオはヨセフに向かって、「見よ、わたしは今、お前をエジプト全国の上に立てる」と言い、(創世記 41:41、新共同訳)

パロは更にヨセフに言った、「わたしはあなたをエジプト全国のかさとする」。(創世記 41:41、口語訳)

今週の聖句

創世記 41:37~46、列王記上 3:12、創世記 42章、ローマ 5:7~11、
創世記 43章、創世記 44章、創世記 45章

今週のテーマ

今やヨセフはエジプトの司政者となり、彼の兄たちはそれと知らずに彼の前にひれ伏します(創42章)。ヨセフが兄たちに弟ベニヤミンを連れて来るよう命じることによって、彼らの高慢は砕かれ(同43章)、——後にベニヤミンの安全が脅かされると(同44章)——、彼らはこの「ファラオに等しい」権力を握る男の前に慈悲を嘆願します。最後にヨセフが、自分がだれであるかを明かすと、彼らは、彼らがかつてしたことにかかわらず、神はそれらすべてから善を導き出すお方であることを知ります。

これに続く、ヨセフの成功とも見える出来事のすべては、兄たちの悔い改めについて、さらに多くを語っています。彼らのヨセフと父の間の、行ったり来たりの旅と、彼らの遭遇した困難は、彼らがかつてヨセフと父にしたひどい仕打ちを彼らに思い起こさせ、彼らはそれが神に対する重大な不正行為であったことを悟りました。ヨセフの兄たちはそれらすべての経験を神の裁きとして生きたのです。それでもなお、感動的な結末の中には、それらの、決して正当化することのできない邪悪な行為にもかかわらず、彼らに対する救いのメッセージが備えられ、この家族すべてが喜びの涙に包まれます。

ヨセフにとってファラオの夢は、この国で神が「これからなさろうしていること」を示すものでした(創41:28)。しかしながら、ヨセフはファラオに自分の神を信じるようにとは言いません。ヨセフがすぐにすべきことは行動することでした。ヨセフは経済計画を提言します。興味深いことに、ファラオの心に留まったのは、ヨセフが語ったことの経済的な部分だけでした。ファラオは、夢の持つ霊的な意味や、それを生み出す神の存在よりも、経済的な進言に興味があったようです。

問1 創世記 41:37～57 を読んでください。ヨセフの成功における神の地位はどのようなものでしたか。

ファラオがヨセフを任命して国を治めさせたのは、彼が夢を正確に解き明かしたことや、やがて国を襲うであろう問題を示したからというよりは、彼がその問題の解決手段を持っており、「ヨセフの言葉に感心した」からでした(創41:37)。ヨセフの進言はファラオの家来たちとも共有されます。ファラオの選択は信仰的というよりも实际的です。そしてなお、ファラオはヨセフの中に「神の霊が宿っている」ことを認め(同41:38)、彼ほど「聡明で知恵ある者はほかにいない」と宣言し(同41:39)、それが神から与えられた知恵であることを示す表現をしています(同42:33を王上3:12と比較)。

聖書がこのように詳細に述べていることはすべて、当時のエジプトの歴史的状況とも一致します。ファラオがヨセフを大臣として任命したことは、政治的に見て、古代エジプトにおいては、外国から大臣(高官)が登用された例として、決してまれなことではありませんでした。

続く7年間は、「ついに量りきれなくな」るほどの穀物の豊作に恵まれます(創41:49)。それは自然を超える神の摂理のしるしでした。「海辺の砂ほども」(同41:49)というたとえば、それが神の祝福であったことを示しています。ヨセフは個人的に二つの事実、すなわち自分が子どもに恵まれた祝福と、同時期に起きた自然現象の背後に同じ神がおられたことを証明する出来事を回想します。ヨセフは神の摂理の経験を示す名前の2人の子どもをもうけますが、彼らは、「悲嘆の記憶を喜びに変えてくださった」という意味のマナセと、「以前の苦惱は変えられ子孫に恵まれた」という意味のエフライムでした。神が悪いことを非常に良いものに変えてくださることの力強い実例ではないでしょうか。

私たちの生き方の中に、他者はどのように神の实在を認めることができるでしょうか。

問2 創世記42章を読んでください。どんなことが起き、人間の悪と不正行為にもかかわらず、それは神の摂理をいかに明らかにしていますか。

飢饉^{ききん}がヤコブに、息子たちに穀物を買うためにエジプトに行かせることを余儀なくさせます。皮肉なことに、それを言い出したのはヤコブでした(創42:1)。この不幸な老人は、彼の力の及ばない状況の犠牲者^{うけつけ}であり、彼がとうの昔に喪に服した息子との再会へと導く驚くべき出来事の渦の中に、それとは知らず巻き込まれていきました。

この出会いの摂理的性質には、二つの基本的な特徴があります。第一は、それはヨセフが見た夢の成就であったということです。ヨセフの夢の中に預言されていた出来事、すなわち「兄さんたちの東が……わたしの東にひれ伏」すとの預言が(創37:7)今実現しようとしていました。ヨセフはすでに「エジプトの司政者」(同42:6)、そして「あの国の主君である人」(同42:30、33)として認められていました。ヨセフの強力な地位は、あわれな彼の兄たちのそれとは対照的です。彼が見た夢のことでヨセフをあざけり、その成就を疑った(同37:8)あの同じ10人の兄弟たちが今、ヨセフを前に「地面にひれ伏し」ているのです。

第二は、この摂理的な出会いが応報として描かれている点です。二つの出来事の言葉と主題は互いに呼応しています。「彼らは……互いに言った」(創42:20、21)という文言は、兄たちがヨセフを亡き者にしようと企てたときにも用いられています(同37:18、19)。兄たちの一時的な投獄は(同42:17)、ヨセフのそれ(同40:3、4)と呼応します。事実、兄たちに今起こっていることは、おそらく20年前に彼らがヨセフにしたことの結果です。「互いに言った。『ああ、我々は弟のことで罰を受けているのだ。弟が我々に助けを求めたとき、あれほどの苦しみを見ながら、耳を貸そうともしなかった。それで、この苦しみが我々にふりかかった』」(同42:21)。

「あの子の血の報いを受けるのだ」というルベンの言葉は(同42:22)、「血を流してはならない」という彼の過去の警告の言葉(同37:22)と呼応します。こうして、彼らが今直面していることは、彼らが過去にしたことの結果であることが再び強調されています。

私たちはほとんどみな、過去にしなければよかったのにと悔やまれることをしたことがあるでしょう。程度の差こそあれ、私たちはどうすればそれらの行為を償うことができるでしょうか。イエスによって赦されるとの神の約束を受け入れることは、なぜ私たちにとって非常に重要なのでしょうか。

彼にただ1人残されたラケルとの間に生まれた息子ベニヤミンを連れて行かせることは、ヤコブにはどうしても同意できないことでした。すでにヨセフを失っていたヤコブは、さらにベニヤミンを失うことを恐れたのです（創43:6～8）。食糧がなくなり（同43:2）、ユダがベニヤミンを必ず連れて戻ると誓ったこともあって、ヤコブは仕方なく兄たちと共にベニヤミンをエジプトへの二度目の旅に同行させることに同意します。

問3 創世記43章を読んでください。ベニヤミンの存在は一連の出来事どのような影響を与えましたか。

ベニヤミンの存在は続く出来事に大きな影響を与えます。兄弟たちが全員ヨセフの前に立ったとき、ヨセフの目にはベニヤミンしか入りません（創43:16）。彼はベニヤミンに対してのみ「弟」という言葉を口にします（同43:29）。ベニヤミンは名前で呼びますが、他の兄たちはみな名前では呼ばず、ただ「この人たち」と呼びます（同43:16）。

ヨセフはベニヤミンを「わたしの子よ」と呼んで特別な愛情表現をしています（創43:29を同22:8と比較）。ヨセフの祝福は「神の恵み」（同43:29）に言及していますが、その時、彼の脳裏にはかつて求めたのに与えられなかった「恵み」〔助け〕がよみがえっていました（同42:21）。ヨセフは今、彼が兄たちから受けることのできなかった「恵み」をベニヤミンに返しているのです。

兄たちが袋に戻されていた銀のために獄に入れられるのではないかと恐れていた頃、ヨセフはベニヤミンに会えたことを祝う宴会の準備をしていました。まるでベニヤミンの存在が、それまでこの兄弟が置かれていた状況をすべて帳消しにしてしまったかのようにでした。兄弟たちがみな、客人をもてなすときのルールにのっとり年齢順に用意された席に着くと、一番年下のベニヤミンの前には他の兄弟たちの5倍の食べ物が配膳されます（創43:33, 34）。昔、ヨセフが父のお気に入りであったときには、それが兄たちには腹違いの弟であるヨセフと父に対する恐ろしい行為の引き金になったのですが（同37:3, 4）、ベニヤミンに対するヨセフのひいきが兄たちの気分を害することはありませんでした。

「こうして、ベニヤミンにだけ特に好意を示すならば、自分のときと同じように、兄弟たちが末の弟にも羨望や嫉妬をあらわすかもしれないとヨセフは考えた。兄弟たちは、あいかわらずヨセフには言葉が通じないと思って、互いに自由に話し合っていた。これは、ヨセフが兄弟たちの本当の感情を知るよい機会であった。彼は、さらに兄弟たちをためそうと思い、彼らが発発する前にヨセフ自身の銀の杯を末の弟の袋の中にかくすように命じた」（『希望への光』114ページ、『人類のあけぼの』上巻254ページ）。

この物語は、先の物語と並列して描かれています。前にもヨセフは〔帰途につく兄たちの荷について〕具体的な指示を執事に与えましたが、同じように彼は再び兄たちの袋に食糧を入れるように命じます。しかし今回は、ベニヤミンの袋に占いの杯を入れるようにというおかしな命令を、彼は付け加えます。

こうして、一連の出来事は新たな展開を見せます。前の旅では、兄たちはベニヤミンを連れて来るためにカナンへ戻りましたが、彼らは今、エジプトへヨセフに会うために戻るので。前の旅では、兄たち全員の袋に同じものが入れられていましたが、今回はベニヤミン1人の袋にヨセフの杯が入れられていました。思いがけなく特別の客人となってヨセフの杯に近づくことのできたベニヤミンは、今は疑われ、その貴重な品を盗んだ者として責められ、訴えられています。彼は獄に入れられてしまうのでしょうか。

ヨセフが占いの杯を使っていたことは、彼がその力を信じていたことを意味するものではありません。ヨセフは、「占いの力が自分にあると言ったわけではないが、彼らの生涯の秘密さえも見通すことができるのだと彼らに信じさせたかったのである」(『希望への光』114ページ、『人類のあけほの』上巻256ページ)。

この占いの杯は、兄たちの心に超自然的な領域を呼び起こすためであり、彼らの神に対する罪の意識を呼び覚ますために用いられたのでした。このことによって、ユダはヨセフからの隠されたメッセージを読み取ります。それは彼の「神が僕どもの罪を暴かれたのです」(創44:16)との言葉に表れています。同時に、この貴重な杯を盗めば厳しい罰を受けて当然ですから、他の兄たちの思いも試すことになりました。

兄たちの感情がどれほど強く動かされ、どのように対応するかが重要です。彼らはみな、かつてヨセフが罪なき者であったのに、エジプトの奴隷になったように、ベニヤミンもまた失われるのではないかと恐れ、同じ心の痛みで一致しました。だからこそユダは、ベニヤミンの「代わり」に奴隷となることを申し出たのでした(創44:33)。それはちょうど、罪のないイサクの「代わり」に献げられた雄羊のようであり(同22:13と比較)、ユダは自分を犠牲、身代わりとして差し出します。それは純粹に、父に襲いかかるであろう「苦悶」を見るに忍びないとの思いからでした(同44:34)。

ユダの身代わりになろうとする返事の中に、どんな愛の原則が示されていますか。このような愛は聖書の救いの神学をどのように説明しますか(マタ5:8参照)。

問4 創世記45章を読んでください。この物語を通して、愛、信仰、希望についてどのような教訓を学ぶことができますか。

ユダが、「父に襲いかかる苦悶を見るに忍びません」（創44：34）と言ったまさにその時、ヨセフは「叫び」（同45：1）、兄たちに「自分の身を明かした」のです。これはしばしば神がご自身を現されるときに用いられる表現であり（出6：3、エゼ20：9）、この時、神もまたご自身を現されたことを意味します。つまり、主は人間の弱さにもかかわらず、その摂理が支配していることを示されたのでした。

ヨセフの兄たちは自分たちが見聞きしていることが理解できませんでした。そこで、ヨセフは繰り返して言います。「わたしは……弟のヨセフです」（創45：4）。この二度目の彼の言葉には、さらに兄たちが信じられるように、「あなたたちがエジプトへ売った」（同45：4）という、より正確な形容が伴っているのを兄たちは聞きます。

そこでヨセフは、「神がわたしを……お遣わしになったのです」（創45：5）と宣言します。この言葉は神の二重の目的を表しています。一つは、ヨセフがもう兄たちに悪い感情は持っていないことを再度示すためであり、同時にそれは、心の底からの信仰告白であり、希望の表現でもありました。なぜなら、彼らがしたことは、彼らに「残りの者」〔子孫〕を与え（同45：7）、彼らが生き永らえ、「大いなる救い」（同45：7）に至るために必要であったからです。

こうしてヨセフは、エジプトに来る準備を整えさせるために、兄弟たちを父のもとへと急がせます。ヨセフはさらに、彼らが「住む」場所について、そこは豊かな牧草地で有名なゴシェンであり、エジプトで「最良の地」であるとの具体的な説明を付け加えます（創45：18、20、英語新欽定訳）。彼はまた旅の移動にも気づかい、馬車を与えますが、それは最終的に、息子たちがエジプトで経験したことを父に話したとき、それが嘘でないことをヤコブに信じさせることとなります（同45：27）。ヤコブはヨセフが活着していることの目に見える証拠として、彼のために贈られた目に見える車を見ます。そしてその証拠は、ヤコブを十分元気にさせます（同37：35、同44：29と比較）。

今、〔ヨセフを取り巻く〕すべてが好転します。ヤコブの12人の息子たちは生きており、ヤコブは今、「イスラエル」と呼ばれ（創45：28）、そして神の摂理はその力強い方法で明らかにされたのでした。

ヨセフは兄たちに慈悲深く応えました。そして、そうする力もありました。私たちは、私たちに向けられる悪が、ヨセフのように好転しないときにも、そのような人々にどうすれば慈悲深く接することができるでしょうか。

参考資料として、『人類のあけぼの』第20章「エジプトにおけるヨセフ」と第21章「ヨセフと兄弟たち」の前半を読んでください。

「獄に監禁された3日間は、ヤコブの息子たちにとって辛く悲しい日々であった。彼らは過去の過ち、特に彼らのヨセフに対するひどい仕打ちを思い返していた。彼らは、自分たちがスパイであると疑われても、彼らの無実を証明する手立てはなく、彼らは全員殺されるか、奴隷になるしかないことを知っていた。息子たちは、父が、苦しみの中に逃げたと考えているむごいヨセフの死の後、彼らの内のだれがどんな努力を払おうと、ベニヤミンを引き離すことに父は同意しないだろうと考えた。彼らはヨセフを奴隷として売ったので、神は、奴隷になって苦しむことによって彼らを罰しておられるのだと考え、恐怖に襲われた。ヨセフは、父と兄弟たちの家族は食べるにも窮しているだろうし、そして兄たちがすでに彼にしたひどい仕打ちを後悔していることはわかっていたので、兄たちはベニヤミンを自分にしたように扱うことはあり得ないと確信していた」（『霊の賜物』第3巻155、156ページ、英文）。

「ヨセフは満足していた。彼はすでに兄たちを試し、彼らの中に罪の真の悔い改めを認めていた」（同165ページ）。

話し合いのための質問

- ① クラスで木曜日の問いについて話し合ってみてください。ヨセフは、彼を取り巻く状況が好転していなければ、兄たちを慈悲深く扱うことはなかったと思いますか。もちろん、それは私たちにはわからないことですが、もしあるとすれば、この物語全体を通して、ヨセフの慈悲深さを証明できるどんな特徴を見つけることができますか。
- ② 私たちはヨセフの中に、どのようにキリストを、そしてキリストが経験されたことの先駆けを見ることができますか。
- ③ ヨセフは兄たちを試みましたが、神は私たちを同じように試されることがあるでしょうか。
- ④ 過ぎ去ったすべての年月の後でさえ、兄たちは、彼らがヨセフにしたことの責めを感じていました。このことは私たちに、罪の責めはどれほど強いものになり得るかについて何を教えていますか。私たちは赦され得るし、神の赦しを受け入れることはできますが、私たちは、自分がどれほど赦されるに値しない者であろうと、自分を赦すことをどのように学ぶことができるでしょうか。